

中期計画スローガンを カタチにするために

④ えびす・ぱれっとホーム編

1993年えびす・ぱれっとホームオープンと同時に、渋谷区から委託を受け緊急一時保護事業2部屋を併設しました。開設当初から年間家賃1300万円を支出し、スタッフの宿直負担を軽減する目的で雇用人数を確保するためにも、緊急一時保護事業を請け負う必要がありました。

グループホーム(以下GH)開設当初は、将来自立生活を目的とした通過型の生活寮をイメージしていました。しかし、家庭の事情や親の高齢化に伴い、入寮してくる家庭のニーズにも応えることで、GHは終の棲家となってきています。福祉事情も変わり地方の入所施設閉鎖に伴い、地域生活移行に考え方がシフトすることで、更にGH需要が高まりました。おかし屋ぱれっとの移転と同時にしぶや・ぱれっとホームのユニット増を行ない、ショートステイのニーズから1部屋確保しました。ショートステイに期待したのは、将来のGH生活を見据えた形での体験型と位置付けました。結果的には緊急一時保護と変わらないレスパイト利用が大半となり、見守り支援が必要な利用者に対しスタッフの確保が必要となり、アルバイト人件費が運営を圧迫していきました。

ぱれっとホーム開設から28年、経験年数の少ないスタッフでこれからのホームの理念を見直し、新たな支援方針を打ち立て、改革を進めていこうとしています。

2020年1月、ぱれっとの事業のこれからを描く上で重要な「中期計画スローガン」が完成しました。コロナ禍で間が開いてしまいましたが、特集として、各事業がこのスローガンをどのように形にしていけるのかについてお伝えしています。今回はえびす・ぱれっとホーム編です

●入所施設を経験し

私は福祉の学校を卒業してから現在まで入所施設でしか働いたことがありませんでした。そんな私がなぜGHで働きたいと思ったかという、地域移行に特化した入所施設の立ち上げに関わる機会があり、障がいのある方が入所施設での生活を経て、地域で暮らす為の支援をすることがきっかけでした。

全ての入所施設ではないですが、入所施設は24時間365日職員や看護師がいて、生活が施設内で完結するという良い点もあります。ご家族には「何かあればすぐに対応してもらえて安心だ」と言ってもらうことも多かったです。しかし地域との関りという点ではどうしても閉鎖的なイメージを持たれてしまうこともあり、入居者の方一人ひとりの意思を尊重して生活が送れるかという難しい場面もありました。好きな時に好きなことができる私たちの当たり前が入所施設では難しいなと感じ、それと同時に入居者の方が住み慣れた地域で過ごし自分らしく生活できることが大切なのではと考えるようになりました。

ぱれっとの「地域の中で当たり前の暮らしをめざす」という基本コンセプトは私が大切にしたい考えの1つです。支援に迷った時や困った時はこのコンセプトを見て基本に立ち返り、入居者の方と一緒に考えながら成長していきたいと思えます。

(香取 麻子)

●ぱれっとでの発見

私は今まで他障がい福祉法人の施設、グループホームを数か所経験してきましたが、ぱれっとで働き始めイベント参加や関連事業所との関わり、緊急一時保護事業など多くの事を学べる事業所だと思います。ぱれっとに入り感じたのがご家族の高齢化に伴いご家族の負担を減らす為ホームで生活が出来る様、様々な事を行なっていることです。通院先をホーム近くに移行しホームで通院同行出来る様にしたり、生活に必要な物の買い出し同行や楽しみにしている嗜好品購入などグループホームとしてのサービスの多さに驚きました。

ホームで自分らしく暮らしていける様、相談にのり理想を実現出来る様支援をしており様々な事を経験しながら障がい福祉の仕事の奥深さを日々感じています。入社当時と今現在でスタッフ体制が大きく変わりました。以前はアルバイトが多く2人体制が常日頃でした。人件費が運営を圧迫、体制を厚くする事により法人が立ち行かなくなるのでは意味がないと思いました。

ホームは入居者にとって「ずっと住んでいたい」と言える居場所である事。ぱれっとは大事な場所だと感じます。現在は相馬理事長、中本施設長がホーム経営や業務整理を行い1人体制でも仕事が回せるようになりました。アルバイトも熱意等気持ちのある方々が業務に入り職員と連携し日々仕事をしています。

えびす・ぱれっとホームの家賃問題等があり経営回復の為まだまだ変えていかなければいけない事があると感じていますが、新生ぱれっとの一員として皆と協力し、より良い環境作りを行なっていきたくと思います。(佐藤 裕)

●入居者と向き合って

自分には福祉の現場経験がないので、入職してから入居者の方とのやり取りの中からお伝えしようと思います。

この約2年で強く感じた事は「コミュニケーション」の大切さです。話を聴くというのは結構難しいもので、入居者の方との関係性が築けていないと本心を聴くことは出来ないと思います。話を聴く為に相手の本心を引き出すには関係性が大事になってきます。その関係性を築く為に必要なことは、やはり「コミュニケーション」だと感じました。とは言え、あまり慣れていない相手に必要以上に接してみても上手くいかないと感じ、もう一つ大事なものは「適度な距離感」だということに気づきました。

「適度な距離感」というものもなかなか難しいもので、こちら側が大丈夫と思って違ったり行き過ぎかなと思って大丈夫だったり、人によって感じ方が違うという当たり前のことの難しさを感じたりしました。「適度な距離感」と「コミュニケーション」という事をすごく考えた2年でもありました。

日々、入居者の方と接していると分からなくなってしまう時もありますが、この2つは大事にして接していこうと思います。そして当たり前のことほど難しいということをお忘れないようにしていきたいと思っています。ホームのこれからを考えるにあたり大事にしていきたい事は、「入居者の方が安心して暮らせるグループホーム」です。集団生活ならではのプライバシーがあり、考え方の違う他の入居者と暮らす事の難しさを感じていると思いますが、相手の話を聴く事によって少しでも安心に繋がると良いと思います。(萩原 徹)

● 入居者と向き合って

入職してからもうすぐ2年がたちます。私も福祉の仕事の経験がなくぱれっとに飛び込んできました。

今まで支援をしてきて感じたことや学んだことはたくさんありますが、特に入居者との信頼関係について考える機会が多くありました。最初の頃はどのように支援したら良いのか迷うこともありましたが、そのような時に、「もし自分が入居者の立場だったら、どのような職員が接しやすいと思うか?」と想像することで、イメージが付きやすくなることもありました。基本理念の一つにある「入居者の方がその人らしい生活を送る」ことは私の仕事の在り方の軸になります。これからも支援の方向性に迷ったときは基本理念や今まで学んだことを振り返りたいと思います。

今私の中で考えているテーマは、共同生活の面白さと難しさです。人間関係に関するテーマはどこにいてもつきものだと思いますが、グループホームの生活支援員としてこの問題に向き合うことによって、大きな学びを得ることができています。この仕事を通して、改めてグループホームの意義を考えてみました。地域の中で共同生活を送ることにより孤独・孤立が解消されるという点はとても大きいと思います。お互いにやりとりを楽しんだり、好きなものを共有したりすることで生活に楽しみを見出すことができます。実際に私もそのような時間を入居者の方と一緒に過ごすことができ純粋に楽しいです。

もちろん、共同生活を送ることでお互い我慢をしなければならない場面も出てきますが、入居者の方が少しでも快適に安心して過ごせるよう働きかけていきたいと思っています。(飯山 直子)

● これからのGHの在り方

6月～8月の間、職員会議の中でホームの基本理念、支援方針について話し合いました。前述のとおり各職員が「考え」「悩み」「気づき」を感じながら業務を行なっているのでたくさんの意見がでました。そういった中から結晶とも言える基本理念・支援方針が出来上がりました。

○基本理念

- ・入居者の自主性・自己決定を尊重する。
- ・入居者の方が地域の中で、その人らしい生活をおくる。
- ・自分の家のような場所として、何でも相談できる家づくりを目指す。

○支援方針

- ・本人の思いに寄り添った支援を行ないます。
- ・本人の強みと可能性を引き出す支援を行ないます。
- ・入居者と同じ目線に立ち課題に対して取り組みます。
- ・自分の事を自分で決められ、不得意なところは見守りながら支援します。
- ・個別支援計画書に基づき統一した支援を行ないます。
- ・共同生活の中で、お互いが認めあえるような生活の場づくりを行ないます。

上記の理念・支援方針にそったホームの運営をしていきます。スタッフ各自が日々の中で「自分の支援にズレはないか」を理念支援方針と照らし合わせ、振り返っていきます。ホームに関わっている全ての方のおかげで、今新しい形が出来上がってきております。関わっている全ての方が幸せになるような事業所を目指し、理念支援方針を思い浮かべながらホームの運営をしていきたいと思っています。(中本 真一)